

本稿は、唐宋成書の三つの文献、すなわち五代・彭曉『周易參同契分章通真義』、南宋成書の『紫陽真人悟真篇註疏』翁葆光注、南宋成書の王道『古文龍虎經註疏』に述べられる煉丹理論の解析を通じて、現在の道教研究における煉丹術の分類である「外丹」と「内丹」の定義を問い直すことを企図したものである。

#### 序章 彭曉の思想と外丹・内丹の分類

本章では、本稿で主として取り扱う五代・彭曉の『周易參同契分章通真義』(以下、『通真義』)が、重要な煉丹文献である『周易參同契』(以下、『參同契』)の現存最古の注釈であり、古来から注目されてきたにも関わらず、そこに説かれる煉丹理論が外丹・内丹のどちらに属する思想であるか未だに結論が定まっていないという研究状況についての疑問を提示した。一般に、煉丹術は外丹と内丹に二分され、外丹は「鉉物を金ないし金と同様の性質をもつとされる物質へと化学変化させる技法」であり、内丹は「気の操作により体内に金丹を生み出す技法」である、という考え方が現在では広く受け入れられている。しかし、あらゆる煉丹文献が全て外丹と内丹に二分され、それ以外の煉丹術の存在を想定していない以上、あらゆる煉丹術はこの二種に区分できなくてはならないはずであり、その意味では彭曉『通真義』のような外丹・内丹のいずれにも区分しがたい煉丹術が存在すること自体が筆者には不審に思われるのである。

そこで筆者は、彭曉『通真義』、及びその思想を継承していると目される『紫陽真人悟真篇註疏』翁葆光注(以下、翁葆光注)、南宋成書の王道『古文龍虎經註疏』(以下、『龍虎經註疏』)を取り上げこれを分析することで、その思想が外丹・内丹のどちらに分類すべきものなのか、検討することとした。そしてもし仮にうまく分類できない場合は、外丹・内丹という分類方法そのものを再点検し、そこに潜む問題点を明らかにした上で解決策を提示することを目指すこととした。

#### 第一章 彭曉『周易參同契分章通真義』

本章では彭曉『通真義』の総合的研究を行った。まず『參同契』、『通真義』、そして『道藏』所収の各種『參同契』注釈について簡単に解説した。

##### 第一節 各種テキストを巡る問題

本節では、『通真義』をそのテキスト面から考察した。まず彭曉本人がどのような構成で『通真義』を制作したのか、その当時の『參同契』はどのような構成であったのか、という点を彭曉の言説から確認した。次いで、三種の現行『通真義』テキストを比較し、その構成や文字における異同を指摘した上で、本稿において用いるべきテキストを決定した。さらに、現行本にまつわる諸問題、つまり後世の改変の痕跡や、その成書年代と流通時期の乖離を指摘し、我々はこのテキストをどう扱うべきなのか検討した。

## 第二節 彭曉の煉丹理論

本節では、『通真義』及び彭曉のもう一つの著作である『還丹内象金鑰匙』（以下、『金鑰匙』）を用いて、主に丹薬の精製理論、火候の調整理論という二点からその煉丹理論を解析した。

まず丹薬の精製理論においては、彭曉が説く「鉛」が極めて重大な意味を持つものであることを最初におさえた上で、五行の変化に着目しながら分析を進めた。その結果、彭曉が五行顛倒（五行相生の順列を逆転させたもの）という思想を用いて、「水↓金↓水」という変化の経路を提唱し、この水から水に戻る回帰のプロセスを「還丹」と呼称して非常に重視していたことが理解された。

続いて火候の調整理論という側面からは、彭曉が『参同契』本文に並列して記されている卦気説・十二消息卦・月体納甲説という三種の象数易技法を「火記」の理論に則って組み合わせ、一日を一ヶ月の縮小形、一ヶ月を一年の縮小形と見なすという独特の方法を用い、これによつて時間を擬似的に加速させることで、最終的には三年間で「四百六十六万五千六百年」分もの正気を収集できることを主張していることが理解された。彭曉は、三つの象数易理論を巧みに総合して自らの還丹理論に組み込み、完成した丹薬の効能に説得力を与えているわけである。

## 第三節 その思想の位置づけ

本節では、彭曉の思想が外丹と内丹どちらに属するのかという問題について、複数の先行研究の検討を通じて、その判断材料となり得る思想的特徴を抽出した。これをまとめれば以下の通りである。

- ① 彭曉はその宇宙観の頂点に、そしてその煉丹理論の根底に、超常的な存在である「真鉛」を置き、これを最も重要な煉丹の材料とする。
- ② 彭曉は一般的な金石草木（「五金八石」等）を煉丹の材料として用いることを、強く否定している。
- ③ 彭曉は実際の装置としての鼎器を用いて煉丹を行う。その際、鼎器の内部における陰陽五行の運行（「内象」）を適切に制御することを重視する。
- ④ 彭曉が作成する丹薬（「還丹」）は、実際の形質を備えた粒状のものであり、これを経口服用することで不死や登仙が実現する。

これらの特徴を現代の一般的な外丹・内丹観に照らせば、①・②の特徴は、「真鉛」という形而上的な材料を用いること、そして金石草木という外丹で用いる材料は否定していることから、彭曉の思想が内丹であることを示唆するものと言える。逆に③・④の特徴は、鼎器という体外において作った丹薬を経口服用していることから、彭曉の思想が外丹であることを示唆するものだと判断できる。つまり、現状の外丹・内丹観を用いる限り、彭曉の思想は読者がどの特徴を重視するかによつて外丹・内丹どちらにも転びうるという、極めて不安定な状況に置かれていることが再確認された。

## 第二章 『紫陽真人悟真篇註疏』翁葆光注

### 第一節 分析の方針と使用テキスト

本節では翁葆光注の思想分析に先立ち、我々ほどのテキストを用いるべきなのか考察し、国立公文書館内閣文庫所蔵の金丹正理大全本を用いることとした。

### 第二節 翁葆光注の煉丹理論

本節では、特に「先天の気」という概念に注目して翁葆光注の煉丹理論の分析を行った。その結果、翁葆光注の煉丹理論は「先天の気から成った丹を服用することで、後天の物質である身体を純陽・無形へと変化させる」という基本的枠組を持っていることがわかった。

また、その理論は具体的には三段階に分かれており、第一段階である「金丹」は、「先天の気」を原料とする丹薬を生成するものである。この「金丹」は、無質である「先天の気」が「龍虎初弦の二気」の交合を媒介として誘引され、有質の丹薬として凝結したものであり、これは体外で作成される丹、すなわち「外薬」である。この金丹を経口服用することで、第二段階である「金液還丹」へと移行する。これは金丹によって自身の真気を励起・収集することで、金丹と自身の真気が交合し、それが再凝結したものである。つまり、「金液還丹」は体内で作成される丹、すなわち「内薬」である。

金丹を陽とすれば、人身は五臓から神・精・氣に至るまでその全てが、陰なるもの、すなわち「後天」の存在として定義される。よって、「先天」の金丹を体外から導入しない限り、目指す純陽の体は決して実現できない。このような「先天・後天」理解が根底にあるがゆえに、翁葆光注は心腎交合や陰陽双修といったいわば「後天」の煉丹を徹底的に批判することが理解された。

### 第三節 彭曉からの影響

第二節における検討により、翁葆光注は彭曉から、①「先天・後天」観、②五行顛倒の思想、③象数易に基づく時間加速の理論という三つの重要な思想を承継していること、そして翁葆光注はこれらの彭曉の思想をよく咀嚼し、無理なく自らの思想として消化していることがわかった。最後に、このような思想の承継は、翁葆光の師匠筋にあたり、また彭曉『通真義』を刊行したとされる劉永年という人物によってもたされたと思われることを指摘した。

### 第四節 龍眉子『金液還丹印証図』への影響

本節では、翁葆光注が後世へもたらした影響の一つの現れとして、翁葆光注の思想を継承している文献としてしばしば言及される龍眉子『金液還丹印証図』を取り上げ、その構成と翁葆光注の煉丹理論が具体的にどのように対応しているのか簡単に検討した。その結果、龍眉子が翁葆光再伝の弟子を自認しており、また『印証図』に説かれる煉丹理論の構造は翁注のそれとよく対応していることが理解された。

### 補節 翁葆光注の著者について

本節では、『悟真篇註疏』翁葆光注の分析の一助として、翁葆光注の著者は本当は誰であったのかという問題について論じた。翁葆光は、無名子・象川翁といった別名を持つ人

物として知られており、さらに『悟真篇三註』（以下、『三註』）に収められている薛道光注も実際は翁葆光によるものとされている。このような翁葆光像が定着する過程において決定的な役割を果たしたのは、『註疏』において翁葆光注を疏解した戴起宗である。彼の「それまで薛道光注として流通していた注釈は、実は翁葆光の作である」という主張は広く受け入れられ、翁葆光像における以後の通説となった。そこで筆者は別本『三註』・道藏本『三註』・『還丹復命篇』という三種の薛道光関連の新発見資料の検討を通じて、戴起宗所引の薛道光伝記の妥当性を批判した。そして、この伝記を根拠として薛道光注の実在性を否定する戴起宗の主張は受け入れるべきではなく、薛道光注は確かに実在していたであろうことを示した。次いで、戴起宗が薛道光注の存在を否定した動機を考察し、張伯端から連なる二つの『悟真篇』伝授の系譜において、翁葆光側の系譜の地位を相対的に引き上げることとその動機の一つがあったであろうことを示した。

また、これまで全く疑われてこなかった（無名子Ⅱ翁葆光）という図式に対して、別本『三註』に基づいた（無名子Ⅱ薛道光）という新説を提示し、この矛盾を如何に解釈すべきなのか考察した。その結果、無名子・翁葆光・薛道光の三名を巡る混乱は、実はかなり早い段階で生じており、戴起宗の時期に至るまで続いていたであろうことがわかった。

### 第三章 王道『古文龍虎経註疏』

#### 第一節 『龍虎経』とその注釈

本節では南宋・王道『古文龍虎経註疏』（以下、『龍虎経註疏』）の思想分析に先立ち、本書の性格について簡単に紹介した。

#### 第二節 著述の経緯

本節では『龍虎経註疏』註疏序に記された王道自伝を主たる材料として、王道が本書を著述した経緯について紹介した。

#### 第三節 王道の煉丹理論

本節では、『龍虎経註疏』の思想分析を行い、まず王道が外丹と内丹を峻別した上で自動的に外丹を選択していることを確認した。そして彼が提唱する「外丹」には、①金属・鉱物等を原料としない、②「真鉛」「真汞」と呼称される原初の一気を原料とする、③鼎・炉などの器具を用いて体外で実際の丹を作る、という三つの特色が存在しており、これは現在の通説における外丹には全く当てはならないものであることが分かった。また、王道も翁葆光注と同様に、彭曉からその特異な「鉛」観を引き継いでいることもわかった。

#### 補章 『参同契』『龍虎経』の受容における『通真義』の意義

本章では、『参同契』テキストの一本化、そして『参同契』伝授の系譜の逆転という二つの観点から、『通真義』が果たした意義を論じた。

#### 第一節 『参同契』テキストの一本化において

本節では、主に欽偉剛氏の先行研究を参照しながら考察を進め、一一五〇年代頃まで継

続していた複数系統の異なる『参同契』テキストが同名で並立しているという混乱した状況において、一一五〇年代以降に流通し始めた『通真義』は、劉永年・葉文叔・翁葆光注・王道、そして朱熹によって正当な『参同契』テキストとして認められた結果、他の様々な別系統の『参同契』テキストをほぼ完全に駆逐し、結果として『参同契』テキストを現行本の形に一本化するに至ったことを述べた。

## 第二節 『参同契』『龍虎經』伝授の系譜の確定において

本節では、『参同契』や『龍虎經』の伝授の系譜がどのように認識されていたのか、またその認識が変化していく過程において『通真義』がいかなる役割を果たしたのかという点に焦点を当て、魏伯陽・徐従事・淳于叔通という三人の人物の先後関係と、『参同契』『龍虎經』『五相類』という三つの文献に着目しながら関連資料を検証した。その結果、彭曉が『通真義』にて『神仙伝』と『日月玄枢論』を根拠として、「『参同契』は魏伯陽が一人で著したものであり、徐従事がこれを注解し、淳于叔通がこれを世に広めた」と強く主張し、それまでの通説であった〈徐従事↓魏伯陽〉という系譜を逆転させ、〈魏伯陽↓徐従事〉（魏伯陽↓淳于叔通）という新しい系譜を提唱し、これが現在に至るまで『参同契』師承の系譜における定説となっておりことがわかった。

以上のことから、『通真義』は、その実質的な流通開始はおそらく南宋・一一五〇年代以降であるにも関わらず、様々な人物たちによって正当な『参同契』注釈として認定され、各種『参同契』テキストの中で最も普及するに至ったこと、そしてその結果、他系統の『参同契』テキストを駆逐し、さらに『参同契』伝授の系譜についての従来の認識をも一変させてしまったことが理解された。四庫全書本『通真義』の提要に「諸家の『参同契』注釈は『通真義』を最古の『参同契』注釈と見なしている」とある通り、これまでは『通真義』は現存最古の『参同契』注釈であるという点のみが注目されてきたきらいがあるが、むしろ『通真義』の本当の重要性は、後発の注釈でありながらも『参同契』という文献そのもののテキスト、及び伝授の系譜を定めたという点にあり、それ故『参同契』受容史を分析する上では『通真義』は最も重要な注釈だと考えられると結論した。

## 終章 「外丹」再定義の試み

### 第一節 従来の外丹・内丹観の問題点

本節では、まず、本稿で扱ってきた三つの文献が説く煉丹理論における共通点を、現代の一般的な外丹・内丹観に照らして分類した上で以下の通り示した。

#### ・内丹を示唆する特徴

①その宇宙観の頂点に、そしてその煉丹理論の根底に、超常的な存在である「真鉛」を置き、これを最も重要な煉丹の材料とする。

②一般的な金石草木を煉丹の材料として用いることを、強く否定している。

#### ・外丹を示唆する特徴

③実際の装置としての鼎器を用いて煉丹を行う。その際、鼎器の内部における陰陽五行の運行を適切に制御することを重視する。

④作成する丹薬は、実際の形質を備えた粒状のものであり、これを経口服用すること  
で不死や登仙が実現する。

その上で、第一章第三節にて先行研究の一例として取り上げた、彭曉の「金石草木の否定」という思想的特徴をもってこれを内丹と判断する見解を再掲し、このような

「金石草木の否定」↓「よって外丹ではない」↓「よって内丹である」

という見解の背後には、「外丹の材料は例外なく金石草木である」、そして「全ての煉丹術は例外なく外丹・内丹のどちらかに分類される」という暗黙の了解が潜んでいることを指摘し、このような思い込みが彭曉らの思想の分類を難しくしているであろうことを述べた。

### 第二節 「外丹」再考

本節では、前節で挙げた「外丹の材料は例外なく金石草木である」という暗黙の了解がそもそも正しいものであるのか確認すべく、外丹、つまり体外で丹を作る思想について改めて検討した。その結果、外丹には実践的な外丹と理論的な外丹という二系統の外丹が存在することを確認し、前者から後者への移行に於いては『易』と陰陽五行思想の導入が大きな役割を果たしていたであろうことを指摘した。このことから、「外丹の材料は例外なく金石草木である」という我々が抱く暗黙の了解は外丹の実態に即したのではなく、我々は外丹に抽象性、または非実践性を認めるべきであることを示した。

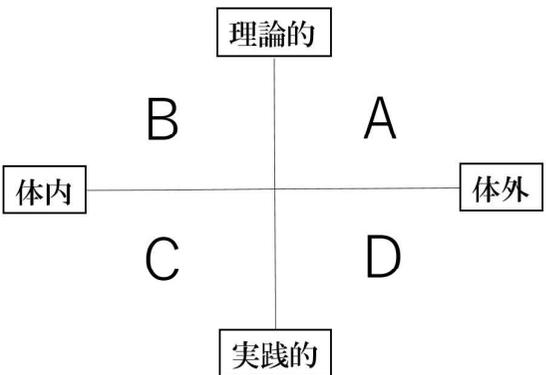
### 第三節 網羅的な分類の試みと「外丹」の再定義

本節では、外丹とは「鉱物を金ないし金と同様の性質をもつとされる物質へと化学変化させる技法」であり、内丹とは「気の操作により体内に金丹を生み出す技法」であるという現在の分類基準は、理論的・非実践的な外丹というものをそもそも想定していないものであり、故に「全ての煉丹術は例外なく外丹・内丹のどちらかに分類される」という暗黙

の了解はやはり誤ったものであることを述べた。

この根本的な問題を解決するため、筆者は、外丹の二系統を分類する基準であった「実践性」と「非実践性」（≠理論性・抽象性）という対立項を外丹・内丹の全体に導入することで、網羅的かつ正確な分類が可能になると考えた。試みにこれを象限図にて示せば、左の通りである。

【図表】外丹・内丹の区分



本図は、「丹薬が完成する地点」を横軸に、「その思想の傾向」を縦軸に取ることで、あらゆる煉丹術を遺漏無く分類することを企図したものである。本図においては、A・Dの領域が「外丹」であり、B・Cの領域が「内丹」に当たる。そして、現状の分類における「外丹」は、「外丹の材料は例外なく金石草木である」という暗黙の了解によってD領域のみに限定され、A領域は黙殺されていたのである。この図に彭暁とその後継者たちの思想を当てはめれば、彼らが提唱する煉丹術は、理論的かつ体外で行われるものであるので、A領域に属する「外丹」であると分類できる。

このような分類を用いることで、誤った暗黙の了解によって実践性を強要されていた外丹の領域（D領域）は拡張され、その結果、これまでその存在を黙殺されがちであった「非実践的な外丹」という領域（A領域）が解放された。同時に我々は、これまで長く外丹・内丹の狭間を揺れていた彭暁、そしてその後継者たちの思想を、「外丹」の一展開、つまり『易』や陰陽五行思想の導入によってその実践性を失い理論化・抽象化していった外丹思想として、無理なく位置づけることが可能になったのである。

#### 結語

本節では、本稿全体の結論として、以下の通り述べた。

第一章にて五代・彭暁の『参同契』注釈である『通真義』等を分析し、そこからその思想の五つの特徴を挙げた。次いで第二章では南宋成書の『悟真篇註疏』翁葆光注を、第三章では南宋成書の『龍虎經註疏』王道注を分析し、その煉丹理論の枠組を解析した。さら

にこの作業を通じて彭曉の思想の特徴がこの二書にも継承されていることを示し、『参同契』・『悟真篇』・『龍虎經』という重要な煉丹文献の、最も代表的な注釈であるこの三書には、思想的な共通点が確かに存在していることを明らかにした。

その上で終章では、この唐宋期の文献群が共有している思想的特徴は現在の外丹・内丹観ではうまく分類できないことを論じ、その理由として、「外丹の材料は例外なく金石草木である」、そして「全ての煉丹術は例外なく外丹・内丹のどちらかに分類される」という二つの誤った暗黙の了解の存在を示した。続いて外丹とその実践性の問題を取り上げ、外丹は必ずしも実践性を追求するものではなく、『易』や陰陽五行思想の導入により生じた非実践的な外丹というものが確かに存在しており、よって前述の二つの暗黙の了解は誤りであることを論じた。最後に、これまでの議論をふまえて、実践的・理論的という対立項を導入することで、全ての煉丹術を網羅できると思われる外丹・内丹の区分図を提示した。そしてこれに従えば、本稿で分析してきた彭曉を嚆矢とする唐宋期の一連の文献群を、従来あまり意識されてこなかった「理論的・非実践的な外丹」の領域に属する思想として、齟齬無く分類できることを示した。

以上が本論文の概要である。